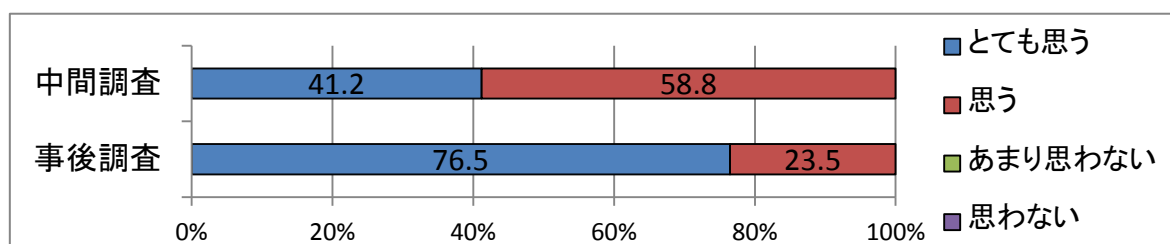


平成26年度 研究支援事業 アンケートまとめ

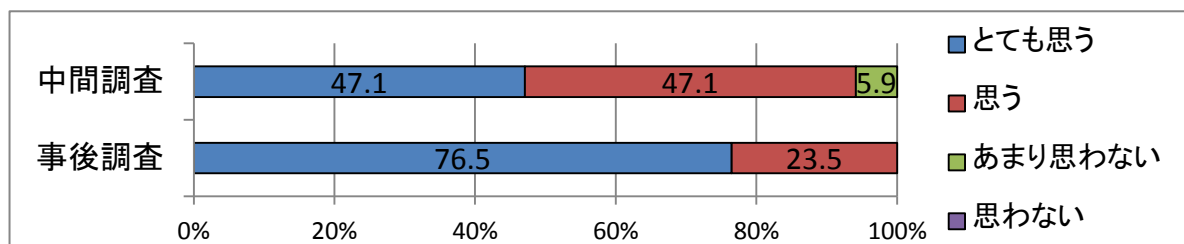
(1) 研究支援事業による研究活動によって、学校組織の活性化が図れましたか。



【アンケートより】

- ・授業スタイルを全教員で共通認識でき、研究発表に向けて連帯感が生まれた。
- ・公開授業や授業研究に対して前向きな教職員が増えた。
- ・研究授業という名目がなくても、他の教員の授業を参観し協議する機運が芽生えた。
- ・教職員全員が研究発表に向け、それぞれの立場で役割を担い、取組を進めた。
- ・新しい事にチャレンジすることによって、教員の活性化につながった。
- ・教師としての自負や誇りを持ち、日々研鑽に努める態度を育成することについて、たいへん意義のある研究活動となった。
- ・若手職員にとって大学教授を招いての研究授業や研究協議を体験する貴重な機会になった。
- ・若手教員に、学校的意思決定に参画させてほしいという気持ちが芽生えてきたように感じられる。新年度以降、若手教員の力を十分に活用したい。
- ・「若手研修の日」を設定することで、向上することへの意識改革、ベテラン教師のスキルを取り入れる積極的な姿勢、日常的に授業見学に若手が入るスタイルが定着してきた。
- ・今後の本校の若手育成の方向性を明らかにすることにとっても効果的だった。
- ・若手教員と中堅教員の連携・協力体制がさらに確立できた。
- ・タブレット端末を用いた授業づくりやインターネット環境の整備、タブレット端末の保管場所の確保や充電時間など周辺環境の整備など、ICT導入に向けての課題が明確になった。

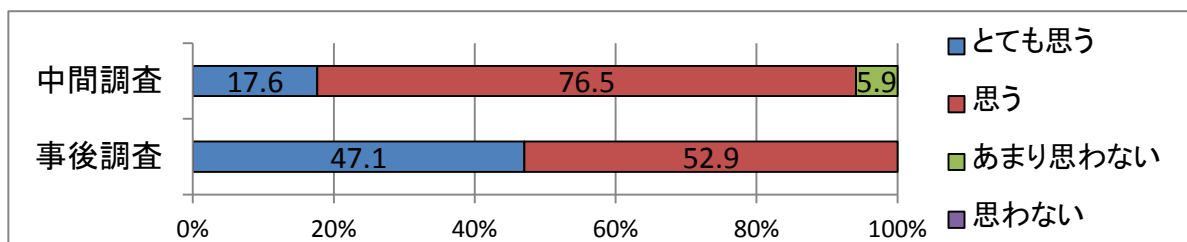
(2) 研究支援事業による研究活動によって、教職員の授業改善が図れましたか。



【アンケートより】

- ・新転任教職員を含め全教員が、よりよい授業のあり方を考える大きな機会となった。
- ・校種間連携を兼ねた近隣小中学校との合同研修会を実施したことで、系統立てた指導方法の構築を図ることができた。
- ・教員は『言語活動』に意識して取り組むことができた。
- ・研究授業を行うことの必要性や重要性が根付いた。
- ・授業のユニバーサルデザイン化を図り、教職員全体で焦点化、視覚化、共有化を意識しながら授業を組み立てる力がついてきた。
- ・教室掲示や板書の工夫などに教員全員で取り組むことで、配慮を要する児童に対する指導への意識が高まった。
- ・教員が積極的に授業研究に取り組み、生徒のやる気を引き出すことができた。
- ・学習場面でどのようにタブレットを活用すれば効果があるかを学校全体で取り組み、授業改善を図ることができた。
- ・「教え込み」から「学び合う、聴き合う」授業へと改善が図られている。
- ・教職員が日々の授業の大切さを改めて感じ、よりよい指導のあり方について考えるためにも、このような研究の機会をいただけることはたいへん有り難い。
- ・外部講師を招いての研究は、本校初の取組であった。教員にとって大きな刺激となった。
- ・講師所属の大学での指導法研修を希望する教員もあり、意識の高まりが見られる。
- ・若手教員相互が、自他の実践を情報交換する取組「アイデア披露会」を実施するなど、よい雰囲気が出てきた。
- ・教員は、言語活動を取り入れたり、ICT機器を活用したりすることに重点をおいて授業を構築することができた。
- ・タブレット端末を授業で活用できたことで、児童の反応、手ごたえを経験でき、今後の導入に向けての不安が軽減された。

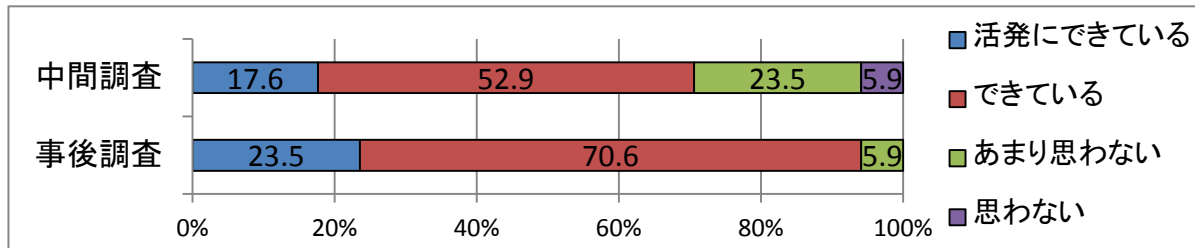
(3) 研究支援事業による研究活動は、子どもたちの学力向上につながりましたか。



【アンケートより】

- ・校内アンケートにおいて、「授業はいろいろと工夫してわかりやすい」と感じている児童は84%と肯定的な意見が増えた。
- ・児童アンケート「図画工作科の学習は楽しい」の項目の肯定的回答の割合が9割を超えた。
- ・ハンドサイン等を取り入れた活発な授業によって、児童が積極的に発言したり、聞き合うことができるようになったりした。
- ・「わかる授業・楽しい授業」の実践により、児童は年度当初に比べて学習に対する姿勢が意欲的になった。
- ・児童について、学級での活発な意見交流と学習に対する積極的な姿勢が見られるようになった。
- ・児童は、互いに考えを述べ合ったり、意見を練り合わせたりすることの楽しさを実感することができた。
- ・「教師が変われば児童が変わる」その通りの結果を得ることができた。
- ・タブレットを用いた教育活動が増え、児童用タブレット端末の操作技能が高まった。
- ・作品づくりや鑑賞活動を通して、児童同士の伝え合う力がつくとともに、地域に対する愛着心を育むことができた。
- ・児童が学習以外の学校生活の場でも言語を意識し、話すことができるようになった。
- ・生徒は、答えをすぐに教員に求める姿勢から、自ら考えようとする姿勢に変わりつつある。
- ・生徒の意識にも自尊感情や自校に対する誇りが芽生えつつある。

(4) 研究支援事業による研究活動を保護者・地域に発信することができましたか。



【アンケートより】

- ・保護者アンケートにおいて、「わかりやすい授業をしている」と回答した割合がアップした。
- ・「授業は工夫してわかりやすいものになっていると思う」と回答した保護者は72%と高い割合を示している。
- ・校内で実施した「授業理解度アンケート」において、児童・保護者とも肯定的回答が90%を超えた。
- ・ネジアート展を鑑賞した保護者や地域の方々から多くの賞賛の声が届いた。
- ・学習参観などで、言語を意識した取組をするなど、保護者に発信することができた。
- ・家庭を巻き込んだ学習がなされ、保護者に学習の様子や学校での取組を十分に理解された。